

総隊長の孫娘～その者、
最凶の料理人につき…
～

名無しのナナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

最凶の斬魄刀を手に千年前の大戦で活躍した死神、山本千歳。彼女は現世にてBLEACHを毎週楽しみに読んでいた一読者である元男性であった。

死神という立場と護廷十三隊で最強の死神という祖父を持つ身でありながら彼が望むのは…。

第二話でアルトウロ・プラテアドについて軽く描写してありますがそういったゲームオリジナル設定が苦手な方はブラウザバックを推奨します。

目次

プロローグ	1
千年後に向けて	4
師の想い	11
思わぬ来訪者	16
更木	21
違和感	25
新しい試み	31
歪な想い	36
予測と現実	42
覚悟	48
願い	54
信念	59

黒ノ天女	66
暗き未来	72
姉弟	78
教え子	84

プロローグ

? 辺りは燃え盛る業火と敵味方、男女問わず死体が築き上げた死体の山に包まれていた。

? その災禍の中心で一組の男女は相見えている。

「……事ここに及んでは認めるしかあるまい、私を以てして貴様のような化物は見た事がない……」

「……」

「——だが、未だ終わりではない……」

? 何度斬り結んだのだろうか、女が持つ惣闇色の刀身を持つ刀により受けたらしき刀傷と火傷を幾重にも受け、今も尚刀身を突き立てられながら男は不敵に笑う。

「それはお前が一番理解わかっているだろうか?」

「……黙れ」

「ッ……」

? グッ……と、握り締めた柄に力を込める女。

顔立ちに幼さを残しながらも戦う者が持つ確固たる意思を宿した瞳と漆の如き髪を背まで伸ばし豊かに実った双丘、…その頬と谷間に返り血を滴らせつつ自身の一部とも言える斬魄刀の力を以て男の霊圧が著しく弱まり男は吐血する。

「…山本元柳斎重國の血を継ぎしお前は千年後にこの私手ずから滅ぼしてやる、お前が大切にしているものも、お前を愛おしいと想う者も、全て、な…」

「黙れと言っている、ユーハバツハ…!」

? くつくつと喉を鳴らし笑う男…ユーハバツハは敵味方問わず此度の戦で流れた血に塗れ薄汚れた羽織に七の数字を背負った女の腕の中で衰弱して行く。

? それは如何なる力も介入を赦さぬ絶対的な死。

? その出生故にあらゆる奇跡を与え、そしてあらゆる命と魂を奪ってきたユーハバツハにとつて山本千歳という女死神はそれ等を上回る力の持ち主であると同時に唯一、深い部分で繋がる事が出来た“他者”であった。

「…その時、お前は知るだろう…千歳…」

「……………」

「私こそが、お前を一番に理解出来る存在である、とな…」
? 事切れるユーハバツハから身体を離す千歳。

彼女自身もそう浅くはない傷を負つてはいるが敵の総大将たる男の前では情けない姿は晒すまいと一呼吸置いてから斬魄刀に纏わり付く血を振るい落とす。

「…仮に千年後に甦ろうとも、その時も私が…否、この——が、全て喰らい尽くしてやるだけだ」

? 誰に聞かせる訳でもない独り言、然しその言葉からは絶望の色は窺えられず千年という気の遠くなる未来を独り見据える気高い魂が存在するのであった。

——同時にそれが、ホッ私ッの目覚めの時でもあったのだと思う——

? これより語られるは一人の転生者異物の物語。

? 幾つもの逃れ得ぬ死と運命を回避しようと、己がエゴを形にして行く元男の物語である。

千年後に向けて

?私…いや、ボクは今、ボクに宛てがわれた部屋でこれまでの事を振り返りながらこれから自分が何をすべきかを考えていた。

?ボクの「今の名前」は山本千歳、山本元柳斎重國の孫娘にして七番隊の隊長をしている。

?だが、あの戦いで前世の記憶が蘇った今のボクからしてみれば肩書き自体は些細なものだ。

「…どう考えても尸魂界だよね…此処…」

?呟いてもボクしか居ない部屋から返ってくるのは沈黙のみ、当たり前か…逆に返事が返ってきたらそれはそれで怖い。

?ボクの前世はしがえない社畜だった、毎日が退屈で仕方のない日々であった。

「死因は…確か交通事故だったかな…」

?ああ、確かそうだ…親子連れを庇ったのを何となく思い出す。

? 100年も前の出来事だったのにも加え、本能が拒絶反応を起こしているのか生前の事を思い出そうとすると霞がかかったかのようにはんやりとしか思い出せない。

? が、ことBLEACHの世界界に於いては唐突に思い出した前世とは違い何とか鮮明に思い出せている。

「…先ず、今から約1000年後に起きる藍染の反乱…あれを利用しない手は無いね」

? 結果だけを言えば千年後に蘇るユーハバツハを倒すには死神全体の質を上げた上で生き残りの破面、何より藍染の協力も不可欠だ。

? 勿論、ボクという異物がこの世界にどう影響を与えるかは未だわからない。

? もしかしたら全体の流れで見たら何も影響を与えないかもしれないし、大きく変化するかもしれない。

「真似…させて貰うしかないよね、千年掛けて」

? だが、生憎だがこと死神陣営に於いては強化の目星は既についている。

? 曳舟桐生、彼女が原作内で一護達に振舞ったように料理を通じて死神達の霊圧を向上させる。

? 勿論、1回に全霊圧を使っては効率が悪い、何より料理人としては未熟なボクだ
…少しずつ、永い時を掛けて強化して行くのが一番だろう。

(…幸い、ボクの斬魄刀に協力して貰えば十分可能な話だけどね…)

『呼んだ? 主〜』

? 腰に帯刀したままの斬魄刀の柄を一撫ですると “彼女” から声を掛けてきた。

「何でもないよ、星葉身」

『そ? なら良かった〜』

? 間延びした声は可愛らしく思わず口元を緩めてしまう。

? 星葉身、それが山本千歳ホクの斬魄刀の名である。

? 炎熱系最強の斬魄刀、流刃若火が最強の火力を誇るなら星葉身はそれすら喰らう可能性のある最凶の斬魄刀だ。

? 少しBLEACHに詳しい人物ならばこう言えば伝わるだろうか。

? 此処とは違う世界線で護廷十三隊を半壊させ、そして山本元柳齋重國お達録が “封印” したアルトウロ・プラテアドフエニテが持つ不滅王フエニテに近い能力。

? それがボクに与えられた星葉身この子の能力である。

「…星葉身、これからもボクに力を貸してくれるかい?」

『んゆ?』

? 何言つてんの? とばかりに眠たそうな声をあげる星葉身であったが、浅打から寝食を共にしていた彼女はすぐに納得したように笑い声を上げる。

『いーよお? 虚こほんを沢山食べさせてくれるならお手伝いするねー』

? ご飯、か…。

? まあ、霊圧を高める為にも大虚狩りは必須だろう。

? ギリアン、アジューカー、欲を言えばヴァストローデを喰つて力を蓄えれば…。

「…うん、勿論。そうしなきゃボクのしたい事が出来ないからね?」

『主のしたいことつてなあに?』

「…:…:本来は死んでしまう人達に少しでも長く生きて欲しい、かな…:」

? 自分でも自分が言っている事は傲慢であるという事は認識している。

? 例えば黒崎真咲さん、彼女の死で主人公である黒崎一護は主人公足り得る性質を持ち多くの人達を救ってきた要因の一つでもある。

? 死神サイドなら志波海燕さん、彼と彼の奥さんの死が朽木ルキアに戦いの意味を刻み付けた。

? 即ち、命を守る為の戦いと誇りを守る為の戦いだ。

？だが、ボクはボクのエゴの為にこういつた本来死ぬ運命にある人々を何とか救おうと
している。

？それが間接的なものにしろ、或いは直接的なものにしろ、意図して行うのであればそ
れは大変傲慢である事は間違いない事だ。

？そんなボクの意図を汲んでも尚、星葉身は笑う。

『そっかあ…主は優しいね、大丈夫！ほっしーも頑張るねっ』

？優しい…という認識が正しいかどうかは兎も角、自身の分身にも似た斬魄刀にこうま
で言われてはボクとしても覚悟は決まった。

「あはは…優しいかどうかは正直わからないけどボクも頑張るよ」

——— ?? ?? ———

山本元柳斎重國 side

「…ふむ…」

？深夜、各隊から提出された報告書に目を通していたが…儂の唯一の血縁である千歳の
報告書…否、最早報告書の体を成してすらいらない我儘に久方振りに全身がワナワナと震
えるのを覚える。

『拝啓、総隊長殿へ』

？此度の侵略で尸魂界にも甚大な被害が出た事は私も存じていますが、だからこそ今一度体制を見返し死神全体の兵力の質を上げるべきと忠言申し上げます。

？同時に、死神全体の質を上げるならばそれに見合う食事の供給も急務であると思料します…堅苦しい前置きは置いといて私、料理人を目指したいと思料します、つきまして、暫くして落ち着いたら旅に出ようと思料しますさがさないでください（☒？☒）キリッ』

「あの…バカ娘があああアツ！」

？ボツツ!!

？と、勢い余って書類を燃やしかねん勢いで滾る霊圧を抑えるが…あのバカ孫めがツ、今の状況を判っておるのか…!

「…失礼します、総隊長」

「…卯ノ花隊長か…すまぬな、呼び付けたのは儂だというのに」

「いえ、気持ちには理解出来ませんから」

？思わず握り潰しそうになった報告書擬きに目を通す卯ノ花隊長…基もと八千流いに問う。

「……どう思う？ 彼奴の劍の師としては」

「……この100年、まるで乾いた大地の如く教えた事を吸収する彼女を指導してきた身としては彼女が無駄な事をするとも思えません」

？ですが、と、八千流は続ける。

「同時に、彼女の事を偶に測りきれない部分もあるのも事実。…旅を通じて何かを探すのか、はたまた將亦……いえ、全ては私のやり方で問えば済む話……」

「……世話を掛けるの……」

？ 愉しげに微笑む八千流の背を見送りながら近く護廷十三隊を揺るがす騒動に儂は深い溜息を吐く。

(……死ぬ事は赦さぬぞ、千歳)

？ 願わくば、両者の何方かが死ぬ前に孫の真意を知りたいと……柄にもなく願うばかりだ。

師の想い

? 今頃お爺様は報告書を燃やしている頃か。

? ボクはあの戦いから三ヶ月経った、ある理由から夜番を変わって貰い部屋で星葉身との対話をしている。

? 辺りは夜の闇が支配し人の気配も…いや、一人だけ背後から声を掛ける女性ひとが居た。

「〃山本〃隊長、今からお時間良いですか?」

? はい、キタアア

? いや、来るとは思っていましたよ? だってそうなるように書いたからね。

「…ええ、構いませんよ、卯ノ花隊長」

? 何時になく不機嫌な…、平静を装いつつも何時でも抜けるとばかりに肉髯口妾の柄に手を伸ばしている八千流お師匠さんの隊長呼びに対し応じるように応える。

「……御自身の責務は理解しているようで何よりです、ですが——」

「ッ」

？一瞬、鋭くも速い光が走ったかと思えば身体がこの太刀筋を覚えていると言わんばかりに、振り返りながら鞘から僅かばかり刀身を見せる事で薙ぎ払われた一撃を受け視線を合わせる。

「今の一撃を受けますか、指導していた甲斐がありますね」

「…卯ノ花隊長、いえ、お師匠。…私が護廷を抜ける事はそれ程迄に罪ですか？」

？確かに、ユーハバツハが率いる光の帝国リヒト・ライヒが齎した被害は甚大ではあった、死した部下達に報いるのが隊長としての務めだろう。

？だが、だからこそ隊長として後進の…いや、死神全体の事を慮るのは罪だろうか。

「…他の隊長ならばそれも良かったでしょう、然し貴女は総隊長の助力もあつたとはいえ一対一でユーハバツハを打ち破つた…その事実と貴女自身の存在は力の無い一般隊士や席官達の希望なのです」

「希望…」

？そう言われてしまえば居た堪れなくなる。

？ボク自身、自分自身を高く評価するつもりは無いからだ。

？寧ろ、前世の記憶が蘇りあの死体の山を見てから毎晩夢で魘される程だ。

? 何故、助けてくれなかったのか、と…嘗ての部下達が血に塗れた姿で現れるのだ。

? お前さえ居なければ、と…白を基調とした生地が真っ赤に染まった嘗ての敵が怨嗟の声を上げて恨み辛みを吐いてくるのだ。

? 転生し、斬拳走鬼を一通り習得している身とはいえ記憶を取り戻した中身は一般人の域を出ていないのだ、一般的な感性の持ち主なら氣に病まない方が少しおかしいだろう。

? お師匠から見たらさぞ顔色が優れないように見えるのだろうか…手にした得物を鞘に納める動作を見て此方も星葉身を鞘に納める。

「…あの日からあまり眠っていないのですね、あれからもう三ヶ月は経つというのに…」

? ボクの意図を汲んだのか、はたまた将亦異なる意図があるのかお師匠はボクの頬に掌を添える。

「…あはは、お師匠には敵わないですね…はい、眠ってしまうと夢を見てしまうので…」

? それ以前に、過去のボクがどうやって寝ていたかも今となつてはわからずにいる。

? ただ単純に眠る、そんな事すら出来ないでいる。

? それでも、…いや、だからこそ、もう誰も死なせたくないが為にボクはボクのやりた

い事をすべきなのだ。

「……これでも四番隊の隊長ですから、……心的ストレスは流石に門外漢ですが……」

? 意識が遠くなるのを感じる……恐らく縛道か回道の何れかを掛けられたのだろう。

「今宵は、貴女が眠れる迄傍に居ましよう……貴女は私の可愛い弟子なのだから……」

? ボクはそのまま、その微睡みの中に抱かれながら意識を手放した。

——?? ?? ??——

? 卯ノ花烈side

? あれから半刻程経ち、可愛らしい寝顔を浮かべる千歳をそつと寝かせつける。

「……身体はある程度成長しましたがまだまだ子供ですね……」

? 無理もない、総隊長や私と違いこの娘は未だ百数年程しか生きていないのだから……死神としては十一番隊を除けば異例の早さで隊長格へと登り詰めた弊害とも言えるだろう。

「……ん……」

「……先程はああ言いましたが、私も貴女に期待しているのですよ……?」

? この言葉に嘘はない。

? 最初は厄介なものを寄越されたと思っていなかったが今では私の不意打ち気味の一撃にすら反応出来る程成長している。

? 無論、今は単純な剣術での死し合あいなら私に分があるのは確かではありませんが。
? 後100年…いえ、環境さえ整えば割とすぐにでも私すら追い抜くでしょうね…。
? この娘の真価とは即ち斬魄刀の能力と本人の剣術にある、それ等が組み合わさった時の実力は…。

? 想像したらこの身は昂る。

? 胸元に残る傷が疼く。

? 私は…。

「…彼か貴女…何方に私は殺されるのでしょうね」

? 本当に、今から愉しみだ。

「ですが今宵は…」

? 流石に衰弱している弟子と死合しあっても面白味に欠ける。

? 私は、そのまま千歳の頭を撫でながら何時か来る瞬間を夢想する事にしました。

思わぬ来訪者

「問題は無い、と申すか……」

？ 早朝、一番隊舎にて孫娘千歳の身を案じていた老人と愛弟子に今出来る最大限の薬を処方してきた師は朝日を浴びながら向かい合う。

「ええ、彼女はしつかりと死神としての責務は理解しています」

？ 自覚し過ぎて悪夢を見る程には、と卯ノ花は続ける。

？ 本来死神は魂のバランスーとしての役割の延長上人間を気遣う事はあるが、己を害せうとする者達に於いてはその限りではない。

？ 何より、今回の侵略戦争は両陣営多大な被害が出た。

？ そんな仇的を慮る孫娘の心境の変化に元柳齋は双眸を細めるばかりだ。

「……悪夢、のう……」

「あの娘は優しい娘です、味方だけではなく本来敵である滅却師にすら心を砕く程には……」

？ 卯ノ花は尚も続ける。

？ 報告書の最後の部分のみを見れば巫山戯ふざけた態度ではあったがあれも自ら道化を演じ

る精一杯の強がりと捉えれば合点も行く。

? それくらいは100年も付き合った間柄、刃と言葉を交わせば見抜けるとばかりに：
そして、その優^{よわ}しさ故に苦しんでいる事をもどかしくも感じるとばかりに言い切る。

「……ううむ……」

? 千年も共に護廷十三隊に所属している卯ノ花の言葉に髭を擦りながらどうするべきか、と眩く。

「……どうかなさいましたか?」

「四十六室より出向命令が出ているのじゃ……儂ではなく千歳にな」

? それは数日前の事であった、被害報告書を提出し次第山本千歳の出向を命じる旨の沙汰が下ったのだ。

「……あの老害共があの子に何を言うのかは理解出来ませんが、貴方はそれで良いのですか?」

? 卯ノ花自体、出自が出自である為四十六室には抵抗感がある。

? 然^{しか}も、このタイミングで総隊長ではなく本人を直接呼び出すような真似をしている様な輩に心象を良くしろ、というのが無理なものだ。

「口を慎め、卯ノ花隊長。……それも尸魂界に必要な事ならば仕方がなからう」

? 思う所が無い訳ではないが、と言わんばかりに窺める元柳斎ではあるが普段の彼から

してみれば弱々しい。

「……唯一の血縁でしょう、貴方は…」

「……………」

? そんな彼の心情を察しているが故に多くは語らずに卯ノ花は一礼した後一番隊舎を後にし、元柳齋はその背を見送るのであった。

「…」

? ……その姿を見守る一人の男の姿が居るのにも気付かずに

——— ?? ?? ??

? 昨夜はお師匠のお陰で夢を見る事無くぐっすり眠れた。

? 枕元にはボク用に処方された薬が入った袋と手紙が置かれていた、…有り難い事だ。

「…さてと、御礼に何をすべきかな…?」

『ほっしーならご飯が良いー』

? まあ、星葉^キ身^ミは、ね?

? けどご飯、か…。

? 料理人を目指すと嘯^{うそ}きながらこの三ヶ月それらしい事をしていない事に漸く気付く。

「…そうだね、先ずは作って食べて貰わなきゃ」

? 思い立ったが吉日、早速作るとしようか。

「た、隊長?!」

??
??
??

「おはよう、今日から私も朝餉を用意したいのだけど構わないかな?」

? 丁度朝餉を用意していた女性死神に微笑みながら既に割烹着を着た姿で小首を傾げると彼女は何度も首を縦に振る。

「は、はいっ! 山本隊長と肩を並べて調理出来るなんて光栄でありますっ」

「あはは、そんなに畏まらなくて良いよ? 朔間」

「お、覚えて貰えていて恐縮です! わかりました!」

? ううん、…まあ、上司と仲良く並んで料理なんて確かに萎縮しちゃうよね。

? それにしても…。

「料理ってやっぱり楽しいねえ…」

? 料理に靈力を込めるのは中々に難しい。

? 普通に包丁で具材を切り、味噌を溶かして味噌汁を作る事は容易いがそれに靈力を込めるのは中々に難しい。

? それも原作では3000人程は存在するとされる死神全体に食事を提供するならばその苦勞は凄まじいものだろう。

「そ、そうですね…」

？緊張もある程度解れてきたのだろう、手馴れた手付きで魚を焼く朔間の視線を受けながら首を縦に振る。

「うん、特に食べて貰う人の反応を想像するとね、それが美味しく出来たらもつと嬉しい」

？前世では自炊は出来る程度には料理を趣味にしていたが誰かの笑顔に繋がる調理は矢張り心が弾む。

「さてと、お味噌汁はこれくらいかな…沢庵を切り分け「山本隊長は居られるか」この声…ちよつと席を外すね、後はお願ひ」

「はいっ、有難うございましたっ」

？割烹着姿で逢うのは躊躇われたが待たせるよりはマシだろうと門の前で待っているであろう人物の元へと向かうとそこには雀部ヤスギベのおじ様が立っていた。

「おはようございます、山本隊長。早速ですが今から少し着いてきて貰いたい場所があるのですが…宜しいか？」

？この時はまだ、まさかあんな形で「彼」と出逢うとは思ひもしなかった。

更木

？東西南北に分かれた上で西流魂街一地区 潤林安じゆりんあんから北流魂街八十地区 更木ざらぎが存
在しているのだが、雀部やぶのおじ様に連れてこられたのは八十ある地区の中で最も治安の
悪い地区である更木ざらぎであつた。

「…なんでも、山本隊長は料理人とやらになりたいようですな」

「ええ、…もしかしてお爺様から反対するように言われて…？」

「いえ、死神としての責務を認識しておられるのであれば今更私が首を突つ込む話では
ないでしょう。…ただ、卯ノ花隊長や山本隊長…ノ字齋殿えいじさいが護つたものを再認識して貰
いたくこうして脚を運んでいる訳です」

？成程、つまりこうする事でボクの覚悟を見定めようとしている訳か。

？確かにあの戦いで勝利したなら自分達が何を護つたのか、それを再認識するのは大事
だろう。

？まあ、別に更木でなくても良い気がするとも思うが…他に何か考えのあつての事だろ
うか？

「……それに、久しぶりに『千歳殿』の手前を拝見したいというのも多分にあります」
 「手前……虚関係ですか？」

「はい、最近何処から入り込んだのか虚を見掛けたと報告がありましたな」

「噂をすれば何とやら、確かに何体か姿を隠しているようだ。」

「尤も、兎戯に等しい潜伏技術ではあるが。」

「……わかりました、では少し待っていてください」

—— ?? ?? ??

雀部長次郎 side

「……矢張りお孫様、か」

「血は争えぬとは良く言うがノ字齋殿えいじさいの血筋の片鱗を見せられ思わず口角が吊り上がるのが判る。」

「報告にあつた虚の数は複数存在し恐らくだが一体は大虚、それもアジューカスが紛れているが山本隊長は始解すらせずにこれを斃す。」

「……いつぶりだろうか、この身が唯の霊庄のみで気圧されたのは」

「幾らあの斬魄刀を扱っているとはいえ、本人の資質も合わさり死神の中でも『異質』だ。」

「何よりも、ものの数秒でアジューカス級の大虚を含む複数の虚が消滅するなど御伽噺

の範疇のようだ。

「…だが…ヒトに刃を向けられた時、はたして貴殿はどうするおつもりか…千歳殿」
 ?この地へ訪れた本当の目的、嘗て卯ノ花隊長から聞き及んだ少年が今もこの地に居るならば…。

(…見定めさせて貰いますぞ、千歳殿)

——— ?? ?? ??

『ふー…』

「(づ)めんね星葉身…?」

?朝ご飯を食べる前におじ様に連れてこられた為に始解をせずに虚の群れを蹴散らし
 たが為にボクは今、ボクの斬魄刀に不貞腐れられていた。

『もー、始解した方が味もしつかり感じられるのにーっ』

?虚つて味がするんだ…というかお腹壊さないの?

『食べる子が強ければ強い程美味しいけどこんな雑魚じゃ物足りなあい…』

?成程、今度齧^{かじ}つてみるか…。

?一人で納得していると獣の様な気配と共に鋭くも重たい斬撃を刃を走らせる事で受け流し突然の襲撃者と対峙する。

「わあ、このお姉ちゃん剣ちゃんの攻撃を受け止めたよ！ 凄いね剣ちゃんっ」

「喚くなやちる、…久しぶりに楽しめそうだったのには賛成だな」

「一合合わせて理解^{わか}る、目の前の相手は唯の青年ではない…化物だ。

？ 無造作に伸ばした髪や衣類から判断すれば唯の魂魄だろう。

？ だが、その隠し切れない霊圧の濃度はそこらの死神を優に超えている。

？ ———というか、後の更木剣八じゃないか彼は。

「さっさとやろうぜ、死神。愉しい喧嘩をよオッ！」

？ 此方を威圧するように立ち昇る霊圧にボクもある程度覚悟を決め解号を口にする。

？ ……出来るなら、ヒトの形をした存在には使いたくなかった力を振るう覚悟を決めて。

「——— 天地喰らいて虚無と為せ 星葉^{ほしはみ}身ッ！」

？ ユーハバツハの未来を見通す能力を封殺していた時以来か、ボクはボク自身の意思で星葉^{この子}身の力を解放した。

違和感

？解号により生じる靈圧の解放により寄せては返す漣せじなみの如き靈圧の中心、そこに居たのは惣闇色つつやみの刀身を持った太刀を持つ千歳だった。

「疾ッ」

「……やろう……ッ」

？上段に構えた上で一呼吸で右袈裟、胴体を狙った一文字斬り、右下から逆袈裟、首を狙った左一文字と悉く急所ないし深く斬り込めば重傷は免れない一撃を繰り出す死神に対してそれを長年手入れもしていないであろうボロボロになった長刀で躲す男の姿があつた。

「……」

？そんな男に何の感慨も持たないとばかりに切り結ぶ死神であつたが、そんな死神に男は愉しみを見出す。

「……似てやがる」

「……」

？果たしてその声は今の千歳の耳に伝わっているだろうか？

? 似ているのはさもありなん。

? 此処に在るは唯の剣鬼に非ず。

? 尸魂界が誇る最凶の大罪人、卯ノ花八千流の唯一の弟子であり彼女が確固たる意思を以て未だ喰わずに居る虎の子だ。

? だが、それを是であると伝える人物は居らず両雄は唯剣がぶつかり合う火花を以て語るのみである。

「おらよッー!」

「…甘い…!」

? 力任せの振り下ろしを刃で受け流しながら心の臓を狙った片手での刺突も刀身を流血しつつも掴む事で寸前で止める剣八。

? そのまま互いを戦う相手であると定めたと言わんばかりに互いの視線と化物じみた霊圧をぶつけ合う。

「ちったあ愉しそうな顔をしたらどうなんだ?」

「……戦いは私にとつては手段でしかない」

「そうかよ、だがテメエの剣筋は愉しそうで仕方がなさそうだがなア!」

「…縛道の八ッ^{せき}斥ッ」

? 前蹴り…所謂ヤクザキックが鳩尾に入る前に後ろに跳躍しつつ小さな円形の盾を張

る事でダメージを完全に抑える千歳、それでも体重の差からか、はたまた将亦劍八の靈圧が高い故か軽く吹き飛ばされる追撃を許す隙を作るも…。

「ツ！テメエ…ツ」

？それを阻止するように六つの光が劍八の身動きを完全に封じる、まるで、一挙手一投足をつぶさに観察していたかのように”

らいめい雷鳴の馬車

？糸車の間隙いとくのま かんげき

？光もて此ひかりを六つこれに別つわか

？縛道の六十一りくじようこうろう 六杖光牢！

？BLEACHの世界には鬼道という死神のみが使える高尚な呪術が存在するが実力者ともなれば無詠唱で術を発動させるのが基本だ。

？然ししか、千歳が今行ったのは、既に術として発動した術の威力を上げる『後述詠唱』という高等技術である。

「…私に貴方を殺す意思は無い、不服かもしれないけどね」

「ふざけた真似しやがって…クソッ、こんなもんすぐ…」

「無駄だよ、貴方の靈圧は殆ど削らせて貰った」

「靈圧だと…？」

？言われて気付いたとばかりにまるで何かに力を「食われている」かの様に疲労感を感ずる。

「…私の斬魄刀は高速で伸び縮みする刀でも無ければ無数の刃に分かれる訳でもない、だけど「喰らって力にする」という一点に於いては他の斬魄刀の追隨を許すつもりはないよ。…暫く自分の靈力で縛られていると良い」

「チツ…次逢った時は覚悟しやがれ…！」

？流刃若火太すら喰らう闇である事を是とする様に自身の靈力十劍八の化物じみた靈力を以て底上げした六杖光牢で身動きを封じ背中を向ける千歳に殺気をぶつける劍八。

「あーあ、劍ちゃん動けなくなっちゃった」

「…後はお願ひ出来るかな、やちるちゃん？」

？戦遊いの邪魔にならないように少し離れた場所で座っていたやちるに近付く千歳、動ける様になるまで結界を張ろうとしたが流石にこの様な手で戦いを切り上げた上に情けまで掛けたとあれば侮辱になるだろうと考えた上で止めたようだ。

「うん、劍ちゃんと遊んでくれてありがとうございました！」

『いーよお、虚だったら遠慮なく食べてただけどねえ』

「わあ、おしゃべりするんだねこの斬魄刀」

？草鹿やちるという存在自体も斬魄刀であると認識した上で、

『うん、星葉ほしはみ身つていうんだ、今度会う時は仲良くしてね?』

「はーい、二人共ばいばーい」

〃本来稀な状況を軽く流しながら〃自己紹介をし別れる。

?? ? ? ? ?

?更木剣八・草鹿やちる side

?死彼神に妙な術を掛けられてから暫く寝ていたが辺りはすっかり夕暮れだ、クソツタレ

…!

「…あの女、次見つけたらただじゃおかねえ…!」

「でも剣ちゃん久しぶりに愉しそうだったよ?」

?此やちる奴には愉しそうに見えていたようだが…まあ、確かに最初は愉しかった。

「……途中まではな」

?そう、あくまで途中まで、だ。

?急に人が変わった様に鬼道とかいう死神が使う術を使ってきた事に苛つく。

?あんだだけ強ければ剣だけで死あ合えば良い、なのにそうしなかった彼奴自身が良くわか

らない。

「あのお姉ちゃんは剣ちゃんを殺したくなかつたんじゃないかなあ、〃必死で藻掻いて

たし〃」

「あ？…どういう事だ？」

？藻掻いていた？

？良くわからない事を口走るやちるに視線を向けるがやちるはこっちを向こうとはしなかつた。

「なんでもなーい、あ、そろそろ解けそうだね！」

？名前も知らねえ死神を庇うような奴でもないが…何となく居心地の悪さを感じながら俺はやちるを連れ時ねくらにしている場所に戻つた。

新しい試み

『さっきの人の霊圧はワイルドな味だった』

「…ワイルド、ねえ…？」

？あれから雀部のおじ様と流魂街を見て周りながら七番隊舎に戻り少し遅い夕餉を済ませた後、日中の戦闘を振り返りながら反省会としてボク達が鍛錬場として使っている溪谷で素振りを一万本している最中だ。

『主、態と〃急所に繋がる場所ばかり狙ってたねえ？』

「まあ、ね？あの人の性質上そうしたまだけど…」

？更木剣八の縛りプレイは前世で把握済みだったし、一太刀一太刀生命を刈り取るだけの鋭さを持った一撃で〃此方の実力に霊圧を合わせるよう修正する〃のも容易かった。

？が、まさか蹴り飛ばされるとは…流石はCV立〇文彦…！

？大体何なんだ、あのイケメンヴォイス！

？あんな声で魔〇剣やら風雷〇剣なんて叫ばれた日には滾ってしかたないのはボクだけでは無いはず…！

？あ、まるでダメなおっさんの方は帰ってどうぞ。

「…やっぱり試してみよっか、ボク達なりの『月牙天衝』を、死神の戦いは霊圧とは言っても筋力では勝てない相手も出てきそうだし…」

『んー…出来なくはないけど多分主が考えてるようなやつじゃないと思う…』
「まあまあ、取り敢えず一回だけ試してみよう」

? 正眼に構え、呼吸を整え精神を集中させる。

「にじ滲み出すこんだく混濁のもんしやう紋章

? ふそん不遜なるきやうき狂気のうつわ器

? わ湧き上がり・ひてい否定し

? しび痺れ・またた瞬き

? 眠りをさまた妨げる

? はしやう爬行する鉄の王女

? た絶えずじかい自壊する泥の人形

? けつごう結合せよ

? はんぼつ反発せよ

? 地に満ち

? 己の無力を知れ!!

? 破道の九十 黒棺くろひつぎ

? 本来辺りを襲う重力の圧は生じず代わりに惣闇色つつやみの刀身の周りがスパークしている。

『ううん、結構重たいお味く、というかお試しが九十番台だなんて主は加減を覚えた方が
良いと思うの〜』

「まあ、どうせ試すなら、ね?」

? 名付けるなら斬鬼術・黒刀こくとう

? 星葉身の喰らって力に変える力を利用し自ら打ち出した鬼道を刀身に纏わせる斬術
と鬼道の併せ技。

? 黒棺が本来与える重力を刀身に一点に留め、振るえばこの辺り一体は地図から消失す
るだろう。それだけの威力は十二分にある。

? 星葉身に窘められ、瞬く間に消化したのを見届ければ今度は三十番台の破道で試して
みる事にした。

「君臨者よ!」

? 血肉ちにくの仮面・万象ばんしょう・羽ばたき・

? ヒトの名を冠かんす者よ!

? 真理しんりと節制せつせい

? 罪知らぬ夢の壁に僅わずかに爪をたてよ!!

? 破道の三十三 蒼火墜!!」

? 今度は青白い焔を刀身に纏う

? この形態を名付けるなら斬鬼術・蒼炎丸だろうか…。

『んー…ミディアム? なんかつう〜…』

「まあ、九十番台を先に試したからねえ、雷吼炮とかも試してみる?」

『んーん、消化しないで留めるのって慣れが必要だから今日は此処までにしとく〜』

? 一見すると強力な斬鬼術ではあるが鬼道を纏わせるという性質上隙はある。

? 奇襲を視野に入れた対人戦を視野に入れるなら縛道の二十六 曲光で刀身を隠し間

合いを誤魔化すという戦い方もあるにはあるし、実際相手をしたら厄介だとは思いますが…

「…今まで以上に剣術も鬼道も、料理も頑張らないとね…」

『うんつ、明日は四十六室つてどこにいくんだよね? 早く休もー?』

? 四十六室、か…原作を読んだ感じでは無能オブ無能、歳ばかり食って煽り耐性0、藍染の方が有能じゃね?…という印象があるが…まあ、どうせ卍解を禁じるとかその辺だろう。

? ……そう思っていた時期が、ボクにもありました、と言いたくなる事態になるとはこの

時のボクは思いもしなかった。

歪な想い

『期間は千年以内、それ迄に虚圏への調査が出来るよう見通しを立て後進の育成に励む事。

? また、それに伴い真央霊術院で教鞭を振るい死神全体の兵力を高めるよう尽力せよ』
 ? これが600年前に四十六室にて沙汰を渡されたボクの今の任務である。

? ユーハバツハの件で三界を監視でもしたくなつたのだろうか、気持ちは分からなくはないが虚圏に繋がる黒腔を開く研究もしろと来たものだ。

? まあ、黒腔に関しては修多羅しゆたらせんじゆまる千手丸さんの助力もあり割と自由に開けるようにはなつたが。

? が、人を育てるとなると簡単には行かないものだ。

? 調査隊を派遣するという事は少なくとも隊長であるボクと肩を並べられる程度には実力が伴わなければならない。

? カリキュラムも四十六室たつての命という事もありある程度自由に振る舞えてはいるとはいえ、…どうしたものかな。

? というか、あれから600年かあ…最近胸が邪魔になってきたと思つていたけど、月

日が流れるのは速いものだ。

「お、おはようございます山本隊長！」

「おはよう、渡部さん、今日は君の苦手な鬼道の授業をするから頑張つてね」

「うへえ、と嫌そうな声をあげる女子生徒を他所に眼鏡を掛けた男子生徒が此方に近付いてきた。

「おはようございます、山本隊長。本日の授業とは関係ないのですが宜しければ今日も……」

「おはよう、藍染君。うん、構わないよ」

「ありがとうございます、では何時もの場所です……」

「そう、原作では詳しい年齢はついぞわからずじまいであった藍染惣右介がボクの受け持つ生徒であった。

「彼よりも100年程前に浦原喜助と四楓院夜一を生徒に持ったが彼等も彼等で或る意味手の焼ける生徒ではあったが。彼は何故かボクに懐いてくれているので表立つて無碍にも出来ず鍛えている。

「教師としては依怙鼻^{えこひいき}に見えるかもしれないが、近くで見えていたくなる危うさを既に持ち合わせている子であった。

「———というか、声だけ聞いてたら毛根死滅してそんな星海坊主^{パピ}やら息子を溺愛して

やまない総帥マジックを連想するのでたまに笑いそうになるのは本人には内緒だが。

?? ?? ??

「はい、お昼休憩の時間だよー」

「つしや！飯だ飯だ〜」

「男子つてやあね、これだから」

「あはは…まあ、沢山作ったからね、食べて食べて」

？ 食育として作る給食はボクが全学生分を賄っているがどうしても一人で回らない時は七番隊の子達にも偶に手伝って貰っている。

？ 期せずして料理人としての道を進めているのは四十六室と七番隊の皆に感謝、といった所だろうか。

？ ちなみに今日のメニューは白米と地鶏の唐揚げ、厚揚げと根菜の煮物と旬の果実100%ジュースだ。

「隊長、私頑張るんで私のお嫁さんになってください〜」

「ううん、じゃあ今日の授業で躓つまづいてた反鬼相殺を完璧にものに出来たら考えても良いよっ。」

「うえ、…が、がんばりまーす…」

？ 渡部さんは本気かどうかは兎も角、やれば出来る子だから頑張つて欲しい。

「……………」

「…？藍染君、どうかした？」

「？じつと私の手元を見ていた藍染に小首を傾げ問うも彼はすぐに何でもないように首を振る。」

「いえ、山本隊長を娶れる男性は幸せそうだな、と思っただけです」

「あー…まあ、そうなのかな？」

「まさかそんな事を言われるとは思っていなかったから面を食らった。」

「ボクとしては元の性別としての意識もある分女性の方が好ましく思う面はある。」

「？が、多分性別は関係無く好ましい人と結ばれたらな、程度の認識しか今の所無いのが現状だ。」

「結局は『何方でも構わない』のが現状だろう。」

「取り敢えず、皆食べ終わったら今度は座学を始めるよー」

「「はーい」」

「面を食らっている間に食べ終えた生徒達の元気な返事に口元を抑えながらボクもボクの分の料理を食べ終える。」

「さ、藍染君も食べちゃお？」

「…ええ、いただきます」

??
??
??

? 藍染惣右介 side

? 私は生まれて初めて理解者になり得るかもしれないあの人に執着している事に気づき口角を吊り上げ嗤う。

? あの人の教えで何故あの程度の事も出来ないのか理解に苦しむ。

? あの人の言葉を交わして何故あんな低俗な言葉しか出てこないのか…。

? この世界の程度に合わせる事に慣れてしまったあの人はこの世界を愛しているのだろうか。

? それ故に、この世界が何れあの人を殺す事を私は許容出来ない。

「…ならば」

? あの人がこの世界に、あんなものに殺されるならば。

「私が、天に立つ」

? 無理矢理にでも、この手にしてみせよう。

「だが、今の私には足りないものが多い」

? それ迄は、唯の生徒として貴女の傍に…

? 山本千歳、私が必ず貴女を…。

予測と現実

? 個人授業を終え宛てがわれた部屋で今日得た知識を文字として綴りながら私は眼鏡を掛け直す。

「……………」

? 私から見た山本隊長を一言で表すなら 得難い理解者 だろうか。

? 先ず最初に言っておくと、彼女は自分自身を誤魔化するのが上手い。

? 彼女の霊圧は並の隊長格の三倍はあるだろう、これは以前野外演習という形で連れて行かれた地にて偶発的に遭遇したギリアンと交戦した際に霊圧感知で瞬間的に体感しただけだが。(その際、彼女は始解すらしていなかった)

? 次いで、彼女は自身が調理した料理に自身の霊力を込める事で教え子である私達の霊圧を上させている。

? 恐らく私達よりも前の教え子も同様に与え続けてきたのだろう、それも私達という器に配慮してか気付かれないように少しずつ。

? その結果、600年という永い時間気付かれ難いが優秀とされる死神達を護る要となっていた事に私や浦原喜助を除き誰も気付いてすらいない。

? : 正直に言うとも最初は侮辱されているのかとも憤慨したが、彼女の人となりを知れば理解が出来る。

? 彼女は彼女に並び得る存在を欲しているだけなのだ、と。

? 千年前、大敵を討ち滅ぼした女傑たる彼女は後進を育てるといふ名目上私達を品定めしているのだらう、というのが私の見解だ。

? 私はその見解に辿り着いた時に彼女を愛おしく感じた。

? 共に頂に並び立つのは彼女以外有り得ぬと理解してしまった。

? —— だからこそ、彼女の持つ能力は危険だとも理解出来る。

? 星葉身ほしはみ

? 斬り伏せた虚の霊圧も糧にする事から私は最初、鬼道系の斬魄刀かと思つたが彼女が言うには放たれた鬼道や縛道、異能や己の恐怖心といった悪感情も喰らうらしい。

? 正しく凶悪無比を体現したかのような斬魄刀。

? 然もこれ等は始解の能力でしかないらしい。

? 卍解したらどれ程の : 否、確か彼女は卍解に至つたとしてもそれが始解よりも取り回しの利く強力なものとは限らないとも言つていたな。

? つまり、彼女の卍解はおいそれと使えるものではないという事か…?

? 私は彼女が卍解した姿を見た事がない、それどころか始解すらギリアン程度では事が終わってからしか見た事がないのだ。

? 取り回しが利かないのは卍解それが周囲に与える影響を考慮した場合、〃始解の方が被害が少なく済むから〃?

「…分からない」

? 全ては予想の域を出ないのだから。

? だが、それこそが彼女の魅力の一つと考えれば…

? 私は自分自身に訪れた変化に口角を吊り上げながら灯りを消した。

——— ?? ?? ??

? 山本千歳 side

? 今、ボクは虚圏に来ている。

? 目的は虚狩りと修行、虚圏は霊子濃度が尸魂界よりも濃い為に霊力のコントロールするには適している。

『今日もやるのー?』

「うん、まだ完璧にものにした訳ではないからね」

? 星葉身の問にすぐさま答える、600年前に編み出した技は月牙天衝の自身の霊力を

喰わせ刃先から高密度の霊圧を放出することで斬撃そのものを巨大化して飛ばすヒントに鬼道を喰わせ圧縮した鬼道を斬撃に乗せるといふものだ。

?だが、星葉身が喰えるのは鬼道だけではない。

?術理を同じくしてボク自身の霊力を喰わせる事も可能であるし、支援として放たれた鬼道を喰う事も出来る。

?まあ、先ずはおさらいだ。

——— ?? ?? ?? ———

?自身の圧倒的な迄の霊力により近付いただけで他の虚を滅ぼすヴァストローデ級の大虚の前に一人の死神が雷光を纏う一本の刀を携え現れる。

「おいおい、あんたか…昼寝中に何の用だ?」

「やあ、久しぶりだねコヨーテ・スターク。取り敢えず私に狩られると良いよ」

「はいそうですか、って狩られると思ってるのか? 鬼事なら他でやって欲しいもんだね、っと!」

?繰り返すは虚閃、然しただの虚閃ではない。

?ヴァストローデ級の虚閃ともなれば威力も絶大であり並の死神ならば死に至るだろう。そうでなくとも近距離からの虚閃ならば隊長格を下がらせる事も出来る。

?——そう、ただの死神ならば。

「いきなり虚閃…ほら、返すよ——」

? 八千流流 返しの刃 柳やなぎ

?と、小さく呟く声とは裏腹にヴァストローデ級の大虚が打ち出した虚閃すら喰らった星葉身を横一閃に振り抜かれた刃は黒い稲妻を放ちながら空間を斬り裂く。

「ツ…今日は何の用だよ、あんたが来ると騒がしくなるんだこっちは」

「特に用は無いよ、喰うか喰われるか…私達の間にあるのはその関係性だけだ…それに、これでも霊圧は抑えてる方だよ」

? 空間すら斬り裂く一撃を躲す…否、 “躲させられた” スターク、彼の喉元に鋒を突き付ける千歳はまるで古い友人のように言葉を交わす。

「…虚より虚らしいあんたらしいな、昔相手した隊長格の五倍はあるんじゃないか?」

「…そうだね、私達は死神よりも虚寄りの性質なのは認めるよ。ただ、五倍あるかどうかは知らないけどね」

「謙遜するなよ、本当なら今頃俺の頭と首は飛んでるぜ、あんたは俺と同じ化物なんだよ」

「……」

? 化物。

？その言葉に否定も肯定もしない千歳ではあるが、虚、滅却師、死神の因子を斬魄刀を経由しその身に宿している彼女は確かに化物と呼ばれても致し方が無い。

「あんたが虚なら良かったと思つた事はあるが、今日は帰つた方が良い、バラガンの爺さんがあんたを探してたぜ」

「あの人が、あの人の配下一個師団を食べた事を未だ根に持つてるんだ…？」

？思い浮かべるは髑髏の老人、自らを虚圏の王と自称する大虚の配下を一体残らず斬り伏せた上で糧とした事に流石にスタークも引き気味に距離を置く。

「あんたそんな事してたのかよ、…まあ、忠告はしたからな」

「あ、…やれやれ、当分虚圏での修行は控えるかな」

？やれやれとばかりに肩を竦めながら一瞬の隙を突き逃走を謀るスタークに情報分の感謝はしているのか迫う事を断念する千歳。

『そうだねえ、主の感情もこの600年で、食べ慣れちゃつたし、他の味も食べてみたいから暫くは尸魂界で出来る事を探そー？』

「食べ慣れちゃつたの？…まあ、暫くは皆の育成に励むとしようか」

？相棒であり下手をすれば自身の破滅を呼び込む危険な隣人^星を鞘^葉に納め、死神の姿をした化物は尸魂界へと帰還するのであつた。

覚悟

?ボクは今、西流魂街一地区 潤林安じゆりんあんを星葉身と一緒に歩いている。

?目的は目新しい調味料が無いかというウインドウショッピングも兼ねた散歩だがこれが中々に楽しい。

「千歳の姉御じゃないですかい、先日はうちのがありますとうございました」

「こんにちは、ゲンさん。たまたま居合わせただけですから気にしないでください。ミヨさんはその後どうですか?」

「幸い産後の回復も早いみてえで…」

「千歳様…!ちよいとあんた、何で呼んでくれないんだい!」

「ああ、あまり無理はしないで…ふふ、こんにちは」

?この人達はゲンさんとミヨさん、数は少ないが綺麗な店員さん達と夫婦二人で小さな料亭を切り盛りしているのだが先日この二人の間に子が設けられた。

?産気づいていたミヨさんが破水した際に丁度居合わせた時に産気づいたミヨさんを介抱し、子を取り上げたのがボクという訳だ。

?死神として永く生きていたがこの時ばかりは師匠の弟子で良かったとつくづく思う、
剣術だけではなく回道もある程度学べていたからだ。

「千歳様の名前を一文頂いて千夜ちよという名前にしたんです、私達の宝です」
?きやつきやと笑う赤ちゃんを見て微笑んでいるとミヨさんが微笑みながら千夜ちゃんをあやしている。

?ボクとしても自分と同じ字を与えられた赤ちゃんが可愛く思えてくるというものだ。

「ふふ、何だか照れてしまいますね…千夜ちゃん、元気に育つてね?」

「あう…」

?? ?? ??

?三人が千夜と名付けられた赤ん坊を囲み仲良く談笑していると隊長羽織の上に女物の着物を羽織った派手な男が見知った背中に声を掛ける。

「や、千歳ちゃん。こんな所で逢うなんてボク達気が合うねえ」

「ん、そうだね、気が合うかは兎も角珍しい…京楽、今日はどうしたの?」

?何時もは隊首会でしか声を交わさない二人ではあるが祖父が山本元柳齋重國である千歳と霊術院時代の教え子である京楽は昔から知己の間柄であった。

「この料亭で出されるお酒が美味しくてねえ、店員の女の子もボク好みの可愛い子達ばかりだし」

「…そ、あまり迷惑掛けないでね、じゃないとお爺様に言い付けるから」

「山じいに言うのは勘弁してよ、そんなにぷりぷりしていると赤ちゃん泣いちゃうよ？」

「……まったく」

「まだ何も分からない赤ん坊を笠に着られては千歳としても口煩くは言えないというもの。」

「時刻も夕刻、そろそろ帰ろうとしていた千歳は踵を返そうとするがそれを制すように京楽はゲンに視線を向ける。」

「ははは、まあまあ、店主いつものを頼むよ、後お酒二つ貰えるかい？」

「へいつ、まいど！千歳の姉御も中に入って座ってくださいえ、今日は奢りまさあ」

「え、いや悪いですよ」

「まあまあ、あの時のお礼だと思ってください、大したもの出来ませんが…」

「…なら、遠慮なく」

「そうそう、遠慮は良くないよ、座った座った」

「半ば無理矢理に千歳の背を押す京楽と申し訳なさげにゲンとミヨに頭を下げる千歳、そんな二人を暖かく迎えるゲンとミヨの二人は店の中へと入り支度を始めた。」

??
??
??

「時間は少し経過し、二人の男女は各々向かい合い酒を飲み交わしながら旬の幸に舌鼓したつみ

を打つ。

「いやあ、良い酒だねえ…：なにより何時も忙しそうにしてる千歳ちゃんに注いでもらうお酒なんて格別だ」

「お世辞をどうも、…：で、何か言いたい事があるの?」

「直球だねえ、…：最近山じいとはどうだい?」

? こうしている時間すら京楽が見計らったものだろうとした上で問う千歳に対し京楽は猪口ちやくに口を付けながら彼女をじつと見詰める。

「…：どう、とは?」

「…：…：虚圏の調査を言い渡されたのはボクも知ってるけど山じいは反対したのかな、つて話さ」

? 虚圏は長い歴史の中で調査に向かった死神が戻ってこない事で有名な魔境だ、その調査を行うという事は常に死が付き纏う場所に肉親を向かわせるという事。

? まあ、実際は霊力欲しさに単身虚圏で修行という名の殺戮行為に及んでいる千歳にとっては修行場と化していた訳だが、基本的に虚圏の調査⇨死を賭した激務と捉えて良いだらう。

? 千歳自身もそれは理解した上で、山本元柳斎重國という個がどういう性質かを説くように口を開く。

「…護廷十三隊の為になるならあの人は何も言わないと思うよ」

「……まあ、ねえ……」

「それに、一死以て大悪を誅す それこそが護廷十三隊の意気と知れ、位は普通に言いそうだ」

「はは、確かに山じいなら言いそうだ」

「けどね、と京楽は続ける。

「それでも、やっぱり孫娘キミの事は案じてると思うよ、分かり難いだけだね」

「……そうかな？」

「そうだよ、と優しく見守るように千歳に酒を注ぎ返す京楽。

「…千歳ちゃん、何を思い悩んでるかは分からないけど話くらいは何時でも聞くよ、ボクは」

「？京楽の言葉に嘘は無い。

「？戦いにおいてシビアな考えを持つが感情を解さない男では無い、幼馴染とも言える千歳相手だからこそ案じている、というのもあるが。」

「？だからこそ、永く誰にも語る事が無かった弱音を彼女は吐いた。

「……例えば、死ぬ事が既に定められた存在を私自身のエゴで救うのは傲慢だと思うかい？」

「…まあ、普通に考えたら傲慢だろうねえ…勿論、千歳ちゃんはそういう所は理解した上で救いそうだけど」

？良く考えた上で出した答え。

？現状、七番隊の隊長でありながら後進を育てる講師である彼女の身になって答えたが彼女は一瞬だけ悲しげに微笑む。

「…京楽、もし私が道を踏み外しそうになったら…その時は「大丈夫だよ」…？」

「君が君自身を顧みれる間は、絶対に、踏み外す事は無いさ」

「…ありがとう、京楽」

？注がれた酒に口を付けながら、彼女は更に覚悟を決めるのであった。

？もう一人の幼馴染浮竹を何としても救うという覚悟を。

願い

? 京楽と酒を飲み交わした翌日、ボクは講師の仕事をこなすべく真央霊術院の廊下を歩いていた。

「ツツ…二日酔いかな…」

『主はお酒あんまり強くないのに昨日は沢山飲んでたからね〜…』

? あまりにガンガンと痛むので思わず頭を抑えてしまう。

? そりゃあ、ねえ…あれだけ勧められたら飲まないのはかえって悪い。

「おはようございませす、山本隊長…」気分が優れないようですが大丈夫ですか…?」

? 背後から声を掛けるのはザーボンさ…じやなくて藍染君だった。

? 普段穏やかに過ごしている彼が心配そうにしているのは中々に貴重だが教え子に心

配掛けてばかりはいられない。

「ありがとう藍染君、昨日は休日だったから少し飲み過ぎちゃって…」

「そうなのですね…」ご自愛ください、山本隊長の代わりは居ないのですから」

? 原因がボクの身から出た錆だと知って幻滅させてしまったかとも思ったが本当に安堵した様に背中を摩ってくれる、男の子の掌って結構頼もしいんだなあ…。

「ありがとう、でも藍染君達もそろそろ卒業しちゃうからね、卒業後はどの隊に所属した
いか希望はあるのかな？」

「ボクが受け持つ生徒の中でも特に優秀な成績を収めている藍染君なら入隊後直ぐに
席官を任せられる事だろう、…これでラスボスユーハバツすら手玉に取る腹黒イケメンでさえなけ
れば、或いはボク自身がその記憶を失つていれば手放しで喜んでいたが入隊後も目を光
らせておかなければ…そんな想いを潜めながら問う。

「そうですね…僕は五番隊が良いのですが希望が通るかは分かりませんし…」

「やっぱり五番隊か、まあ七番隊には来ないだろうなあ…とは思っていたから一応平子
君に忠告はしとこうか。」

「大丈夫だよ、君は優秀だからきつと五番隊に所属出来る」

「山本隊長にそう言つて頂けると自信に繋がりますね、ありがとうごさいます」

「ふふ、さ、授業に遅れないように教室に行きなさい、私は少し準備があるからまた後で
ね」

「わかりました、…それでは、また後ほど」

「授業に使う教材を用意するのを忘れていたボクは藍染君の背を見送りながら教材を
用意するのであつた。」

「授業が終わつたら浮竹の見舞いに行く為に。」

?? ? ?

? 時刻は夜、月明かりが照らす雨乾堂うげんどうに黒髪を結った千歳が姿を現す。

「やあ、浮竹」

「千歳か、珍しいな…あがつてくれ」

「お邪魔するよ、…気分はどう?」

「今日は頗る調子が良いよ」

? そう言う浮竹ではあるが彼の顔色を見た千歳は盆に乗せた粥を落としてしまいそうになるも穏やかに微笑む。

「よかつた…、…浮竹、今日は話があつて来たんだ」

「話?」

? 普段…というよりも600年程忙しく動いていた千歳は昔とは違い京楽や浮竹とは疎遠になつていた。

? 言葉を交わすのは隊首会のみ、それも千歳自身意見を述べるのは珍しいという徹底ぶりであつたが久しぶりに自身を見舞つてくれた幼馴染千歳の言葉に浮竹は首を傾げる。

「…私がユーハバツハを斬つたのは知つているだろう?」

「…ああ、知つている。元柳斎先生じゃなく何故千歳が、と思つていた時期もあるからね」

? 600年も死神をしている者も珍しい昨今では千歳は隊長というよりも手製の料理を振舞い優秀な死神を次々と排出させている女教師という側面ばかりを知られている。

? 無論、あの山本元柳斎重國の血縁者であり卯ノ花八千流としての卯ノ花を師に持つ者だ、その実力は当代の剣八である剗屋敷剣八ですら一目を置く程である。

? それ故に、彼女の實力を “正しく” 評価出来る者は限られている…。

? そう、幼馴染である浮竹ですら。

「…当時はお爺様より私の方が斬魄刀の能力を込みでユーハバツハに対し “有利に” 戦えたから、というのが真相だね」

? だが、今はその様な些事さじはどうでも良いとばかりに千歳は続ける。

「なるほど、それが今から話す事と何か関係があるのかい?」

「…私の斬魄刀の能力は喰らう事、霊圧や鬼道、虚閃…能力すら喰うこと。だけど——」

? 私の卍解は、と一旦区切りながら

「——私の卍解の “一部の能力” は喰った対象の能力を完全に私自身の能力として扱う事…始解の時でもごく一部は使えるけど卍解した状態なら100%扱える」

? そう、彼女の斬魄刀の最たる能力は喰らう事。

? そして喰らったものが己が血肉になるのは生物ならば理解出来る自明の理である。

? 無論、それだけなら最凶の斬魄刀とは呼ばれないが今は割愛する…少なくとも、能力の一部であると語る千歳は基本的に嘘を嫌う性質のようだ。

? そして、ここまで聞いて何も理解出来ない程浮竹という男は愚かではない。

? 京楽と同じく彼もまた千歳同様古くから護廷十三隊、その十三番隊の隊長を任せられてきた男だ。

「………そうか、*“視た”*んだな、ユーハバツハの未来を見通す能力で…俺の死に様を…そして」

「…待って、その続きは私が言うから。…いや、言わなきゃいけないから……—」

? ——浮竹、私と一緒に生きてくれないか、私は…ボクは貴方に生きて欲しい。

? 虚にとって最凶の死神千歳は覚悟が鈍らぬように幼馴染浮竹の眼をじつと見つめながら身体と唇を震わせ言の葉を紡ぐのであった。

? ——その言葉が、あの死に様を否定していると…幼馴染の琴線に触れる事に繋がる
と理解した上で。

信念

？月明かりが二人を照らす中、千歳は感情が昂つて居るのか目尻に涙を浮かべ浮竹を見つめている。

「…千歳…」

「…ボクは“もう”誰も失いたくない、父様も母様も…」

「……幾つか質問をしても良いかい？」

？彼女を落ち着かせるように浮竹の指先は目尻に浮かぶ涙を拭い、千歳もそれを受け入れながら首を縦に振る。

「…ん…」

「…先ず一つ、俺はどうやって死ぬ？」

「…今から四百年後にユーハバツハが蘇り、靈王は逆に死を迎えるけど世界の均衡を保つ為に靈王の右腕であるミミハギ様を解放する…それすら奪われる形で…」

「…そうか、ミミハギ様はやはり靈王の…」

？些細な違いはあるだろうが概ね千歳の言つた死因が正しい。

？葉代わりにしていたミミハギ様を奪われるという事は病死という形で浮竹の命を

奪った、然し今の医療技術では浮竹の病を直せないのは事実。
? そう、奇跡でも起きない限りは。

「…千歳の案はユーハバツハの能力を使用するものとして捉えるが千歳自身に何かを強いるのか?」

「…ユーハバツハは自身の魂を分け与える形で対象の心身の欠落を満たせる、ミミハギ様を最初に摘出して私の魂を分け与えれば…ただ、全く違う要因で浮竹が死んだ時は浮竹の能力や力を私が引き継ぐ事になるけど…」

? 魂を分け与えるという言葉に浮竹は眉を寄せるがそれは「文字通り」共に生きるという事。

? 長年自らの肺と一体化していたミミハギ様を摘出する代わりに自らの魂の一部とはいえ差し出すという覚悟、その眼差しからその強さと慈愛にも似た想いを見据えながら浮竹は続ける。

「…千歳はそう迄して俺を救おうとしてくれようとしているんだな…何故、と訊くのは無粋かもしれないが訊かせて欲しい」

? 男女の情と呼ぶには些か気心が知れすぎた間柄、浮竹は家族に見せるような穏やかな表情を浮かべ問う。

「…ボクはお爺様や周りに比べて凡庸だ、京楽や浮竹みたいに頭が良い訳ではないし師匠みたいに劍の才能もない、…お爺様みたいに炎熱系最強の斬魄刀を持っている訳でもない」

「でも、と続ける千歳。」

「ボクは『普通』だからこそ護りたいんだ、好きな人達を…大切な居場所を」

「彼女は自身の内面を凡庸と語るが事実は異なる。」

「凡庸だからこそ、600年も掛けて靈力を求め单身虚圏に乗り込むという荒行を熟す胆力。」

「先を見通せるからこそ例え仇敵の能力だろうと知識を動員し計画を練る決断力。」

「そのどれもが、『周りに比べて非凡ではない自身を顧みれる』彼女の強みである。」

「……参ったな、理由次第では突っ撥ねるつもりだったが…」

「負けた、とばかりに微笑む浮竹。」

「これは信念ひと信念ひが目に見える刃ではなく言葉という刀を交わし合う一種の死合であつた。」

「?そして、大切な居場所と呼ばれた側浮竹は深々と頭を下げる。」

「…千歳、君を信じる。俺の方こそ宜しく頼むよ」

「……ありがとう、浮竹」

「いやあ、良かった良かった。二人共喧嘩しないで」

? 嬉々とした表情を浮かべる千歳の声に釣られるようにこの場には居なかつた筈の聲が割つて入る。

「京楽……お前何時から居たんだ?」

「そうだねえ……『浮竹、私と一緒に生きてくれないか』つて千歳ちゃんが言つた辺りからかなあ……まさか千歳ちゃんがつて身を乗り出しちやつたよボクは」

? ケラケラと笑う京楽、言葉尻だけを取れば愛の告白にも捉えられる言葉を紡いだという事実が今更になつて千歳を羞恥の色に染め上げていく。

「き、ききききき……ツ?!」

「お、落ち着け千歳……京楽も居るなら居るつて言つても」

「だあつてボクだけ仲間はずれなんて寂しいじゃないか、ねー千歳ちゃん? 今どんな気分だい?」

? 京楽の煽るような一言に理性の糸が ぶつりと、切れた千歳は指先を向けながら並の隊長格の五倍はある靈力を圧縮し

「破道の一 衝オオオつ!?!」

? 軽々と躲す京楽。

? 千歳を宥めようとする浮竹。

?目をぐるぐると回しながら大砲にも似た衝撃波を幾つも繰り出す千歳。
?600年前、まだ何も知らない童だった頃の三竦みがいっつの間にか出来上がった。
た。

??
??
??

?それから半刻程経ち、穴ぼこだらけの雨乾堂うげんどうでボクは頭を下げていた。

「ご、ごめん…」

「いや…悪いのは悪ふざけをした京楽だ」

「それはもう謝ったじゃないか…それで千歳ちゃん、本当にやるのかい?」

?流石と言うべきか、京楽はボクをじっと見つめている。

「勿論、やるよ。京楽の考えも分かるけどね」

「あ、やっぱり気付いていたんだね」

「気付いていた…?」

??どうにも腑に落ちないとばかりに首を傾げている浮竹に京楽は分かり易く問題点の一つを上げる。

「千歳ちゃんの言う通りユーハバツハが四百年後に復活するなら同時に同じ能力の持ち主が二人居る事になるだろう?」

「なるほど、そういう事か」

?得心を得たように頷く浮竹だが、ボクは問題ないと補足を付け足す。

「その時は多分何方がより強い靈力の持ち主かで変わつてくると思う、魂を分け与えた人達には影響はないだろうけど…その為に600年力を蓄え続けたんだから…」

「綱引き、つて訳か…千歳ちゃんとしては虚圏に早く行きたかつたんじゃあないかい?」
?そう、これは綱引き。

?ボクとユーハバッハという同質の力を持つ両者が互いを妨害し合いながら能力を奪い合うといった戦いだ。

?というか、やつぱり京楽は鋭いなあ…まあ、お爺様にも秘密で虚圏に行つてる事は二人にも秘密にしておきたいから黙るしかないけど。

「…ま、まあね…?」

「千歳…まさか君は…」

「と、取り敢えず早速始めようか!」

?二人の追及から逃れるようにボクは星葉身を鞘から引き抜く。

『久しぶりだねえ…』

?そうだね、星葉身…いや——

「卍解 星食み」

「…!!」

？ 正解と共に聞こえる息を飲む二人の声を耳にしながら…。

？——ボクは闇夜よりも昏い闇を身に包んだ。

黒ノ天女

？桜の花弁が舞う中、ボクは今日という日を迎えて少し涙ぐんでいた。

「卒業おめでとう、皆」

「うう…山本たいちよおー…」

「俺まだ隊長の授業受けてたいっす…！」

「…うん、私もだよ…でも皆なら各隊に配属されても上手くやってけるって信じてるから」

？何百年も教師をしているが矢張り慣れないものだ、ボロボロと泣いている教え子達の頭を撫でながらボクも涙を堪えていた。

「山本隊長…、ありがとうございしました」

「私の方こそありがとう、藍染君。教えているようで改めて教えられる時間だったよ」

？藍染君も思いの外感傷に耽ているように見受けられる、…彼は何故かボクに懐いてくれていたからボクとしても今日だけは純粹に言葉を選ばず接していた。

「そんな…僕は何もしていませんよ、でも山本隊長にそう言つて貰えて光栄です」

？気恥しいのか視線を一瞬だけさ迷わせたようにしながらも穏やかに微笑む彼は、矢張

りボクが知っている道を歩むのだろうか…。

「600年前、利用しようとした彼の計画とこれから歩んで欲しいと願う彼の道、それ等が決して交わらないものと知りながらボクは優しく微笑む。

「ふふ…、藍染君は多分これから忙しくなるだろうけど何かあつたら何時でも相談に乗るからね?」

「ありがとうございます、山本隊長に学んだ事を糧に精進していきます」

「今浮かべている笑顔を偽善と知った上で、ボクは彼等が歩むであろう道未来に思いを馳せるしか出来なかった。

———
?? ?? ??

「場所が変わり十三番隊舎内の某地。

「今頃千歳ちゃん卒業式に出席かあ、…体調はどうだい?浮竹」

「…不思議なものだな、布団から出て畑を耕すなんて少し前の俺からは想像が出来ないよ」

「手拭いで顔についた泥を拭う浮竹と新しく出来た畑に肥料を撒く京楽は二人で此処には居ない千歳の話題をしていた。

「まあ、浮竹とは付き合いが長いボクも驚きなんだけどねえ」

「何時も助かってるよ、…それにしても…」

「…千歳ちゃんの事かい？」

? 小さく頷きながら浮竹はあの夜起きた事を思い返す。

?? ?? ??

? ただそこに存在するだけで圧死しそうな程の霊圧とそれに見合うだけの存在感を身に纏う黎い羽衣を身に纏う天女、…いや、普段の虹色の瞳から血よりも紅い瞳を俺達に向ける千歳に俺は息を呑む。

「千歳…なのか？」

? 思わずそんな当たり前な事を訊ねてしまう、それ程目の前の女は千歳とは佇まいからして違っていた。

「…私は千歳であり星食みでもある者」

「斬魄刀の人格と一体化していると言うのかい？」

? 千歳であり彼女の斬魄刀であると無表情で語る女の言葉に京楽が問う。

(斬魄刀と死神の同化だと…?)

? 斬魄刀とは本来浅打から持ち主である死神の魂の形を型取り、やがてその死神の霊力で形や能力が出来上がるもの。俺の双魚理も京楽の花天狂骨もそうやって今の形になった。

? だが、千歳と千歳の斬魄刀^{星葉身}はそうするのが自然とばかりに根底の部分から完全に同化

してしまっている。

？五倍から十倍なんて比ではない、それ以上の霊圧とそれを漏らす事無く圧縮した力を隠そうともせず、目の前の女は銀色に変色した髪を夜風に靡かせている。

「そうなるな、…さて、私がこの姿になった本来の目的を果たすでしょう」

「…っ…」

？彼女の霊圧が闇を支配すると俺の身体から何かが抜け落ちたのと同時に暖かな温もりが俺の中に溶け込むのを感じる。

？そして、長年苛まれていた苦痛から解放されたように身体が軽くなるのを感じた。

「……これは来るべき時迄、私が預かっておこう、そして…私千歳より早く死んでくれるなよ

？彼女が哀しむのを私は望まない」
星食み

？痛みを与える事もなくミミハギ様を摘出し、俺の方を向き無表情で語る彼女に底知れないものを感じるが問いかける。

「…君は一体何者なんだい？」

「——私は千歳であり星食み、そして——それ以上でもそれ以下でもない」

「…なるほどねえ…」

？長年体内に入っていたものを摘出し、他者の魂を受け入れるという未知の疲労感で肝心な部分が聞き取れなかったが京楽は今のやり取りで何かを察したようだ。

「…千歳は無事なのか？」

「一番大事な部分を問う、俺が救われたとしても千歳が無事でないならば意味が無いからだ。」

「問題無い、…私が表に出て来るのも今となつては珍しい位だ…さて、役目は果たした、さらばだ」

「千歳…！」

「自ら卍解を解いたのだろう、崩れ落ちる千歳を抱き抱えながら俺もまた意識を手放した。」

——— ?? ?? ??

「…これからどうする気だい、浮竹」

「…どうもしないさ、アレも千歳の一面なら俺は共に生きるだけだ」

「浮竹の覚悟は硬い。」

「それは千歳が自らの魂を掛けて自身を救おうとしたというのもあるが知っていたようでいて斯様な化物を持って余しながらも長い間独りで抗っていた幼馴染に唯一出来る親愛の表し方であった。」

「が、浮竹の背中を京楽は軽く叩く。」

「…ボク達が、の間違いだろうか？」

「…京樂…」

「アレが本当はどういった存在か、というよりも千歳ちゃんが自分自身を見失わないようにボク達でフォローした方が建設的だよ」

「京樂は敢えてあの夜に姿を現した千歳がどういった存在であるかを答える事はしなかった。」

「それは親友の為か、はたまた将亦別の思惑からか定かではないが思慮深い彼の事だ、必要に迫られれば何れ彼の口からアレがどういった存在であるかは語られるだろう。」

「…すまない、恩に着る」

「今はただ、親友の配慮に感謝を述べ長年床に伏せる事の方が多かった身体を動かす浮竹であつた。」

暗き未来

? 浮竹と共に生きる事を誓い幾日が過ぎたある日の夜、見渡す限りの闇の中、羽衣を身に纏う二人の山本千歳は邂逅を果たす。

『良く来たね、歓迎するよ私』千歳

「…私、星食みどうかしたのかい？」

『自分でも理解わかっているんだらう?』

? 見渡す限りの闇、闇、闇。

? 生物は存在せず地平線すら無いのではと思われる空間は彼女達の内面であり精神世界。

? 星食みは己が主を血よりも紅い瞳で見つめながら、千歳は虹色の瞳で星食みを見つめながら向き合おうと千歳は肩を竦め頷く。

「……まあ、ある程度覚悟はしていたからね」

? ミミハギ様を摘出する迄は星食みも許容していたが問題はそれから、現在ミミハギ様は…霊王の欠片は千歳と同化している状態だ。

？それはいいよよ以てユーハバツハとの接触は避けられざるものとなったと同時に新たな力を宿す事を意味する。

『…なら、次に私達がすべき事はチカラの使い方に馴れる事だということにも気付いているのか？』

「使い方、ね…だから此処って訳か」

？自分達以外存在しない空間で星食みとして顕現した斬魄刀は主に対し惣闇色の刃と嘗ての…そして未来で邂逅を果たす仇敵であるユーハバツハが用いていた天を覆わんばかりの巨大な弓を使い剣状の矢を放つ。

『此処は私達が共有する心象世界、つまりは精神を形あるものにした世界だからな、尸魂界で暴れるよりは修行に身も入るといふものだ。

？——故に、こんな場所で死んでくれるなよ？私』千歳

「いきなり滅却聖矢の乱れ打ちとは手加減を知らないね…！」

？精神世界であれ振るわれる力は本物。

？矢を矢で迎撃する事で軌道をずらしながらお互いが放った矢を掴むと瞬歩を以て肉薄しつつ両者は斬り結ぶ。

『それを同じ手段で迎撃出来るなら応用をしましょう』

「ッ!？」

？ 滅却聖矢ハイリツヒ・プファイルに虚閃を混ぜ合わせた独自の技を受け怯むひる。

？ 死神、虚、滅却師…卍解という限定的な条件下ではあるが己が血肉となった者達のを扱う星食みだからこそその戦術に目を見開くは斬魄刀しんぱくとうの持ち主である千歳であった。

『斬鬼術・黒刀！』

「くッ…！」

『避けてばかりじゃ私には勝てないぞ、四百年後に完全復活を果たすユーハバツハに勝つつもりなら私を超えてみせろ！』

？ 本来の威力よりも魔改造された滅却聖矢ハイリツヒ・プファイルに空間すら歪曲させ捻り斬る斬鬼術、寧ろ勝てる相手の方が少ないが確かに未来に干渉する術を持ったユーハバツハは最強にして最凶の敵である。

？ とある理由から正史本編よりも苦戦する状況を作り出そうとしている千歳にとつて、星食みは最高のパートナーであると同時に超えねばならぬ壁として立ち塞がっていた。

「負けて、たまるか…ッ！」

『食らいつくじやないか、ペースを上げていくぞ…！』

？ 惣闇色の刃と対を為す様に振るわれる光の刃、四本の刃は互いを肯定する様に斬り結ばれる。

？ その最中、千歳はユーハバツハのこれから起こる全てを見通す能力 全知全能ジ・オールマイティ であ

る未来を観る。

?? ?? ??

? —— 今からお前達を殴る、この子達に詫びろ…ッ!

? 繰り出されるは超圧縮した霊圧と黒き焰を纏った鉄拳。

? 女の身と悔ることなかれ。

? 身に纏うは黒き太陽。

? 己が身を焼く焰は既存のどの鬼道にも属しておらず、教え子を救えなかつたと慟哭する彼女は深い哀しみとそれと同じだけ怒りに燃えた鬼…否、文字通りこの場に居る全ての生物にとつての“死神”であつた。

?? ?? ??

「これ、は…!」

『…近い将来起きる未来を視たようだな』

「…痣城…か」

『貴族達の馬鹿騒ぎは随分前からあつたが、…どうする?』

「……救^{たす}けるよ、この手を伸ばして救えるのなら…それが本来の未来^{歴史}を変える事だとし

ても」

?それが、ボク達が歩んで行くと覚悟した道本来なんだから、と、600年前に覚悟を決めた時と同じ顔で…同じ瞳で自身を見詰める千歳に星食みは穏やかに微笑んだ。

??
??
??

?それから百年後。

「今日から私も真央霊術院に通うのね…」

?緊張した面持ちで真央霊術院が支給する制服を身に纏う一人の少女は教室へと向かう道すがら背中に七の数字を背負う女教師にぶつかると。

「きゃ…っ」

「つと、大丈夫?ごめんね」

「だ、大丈夫です…っつて、貴女は…!」

「っ…貴女は…」

「は、初めまして!私は痣城あざしろ、今日からご指導ご鞭撻の程宜しくお願いします、山本隊長!」

?運命の歯車が動き出している事にも気付かず、痣城と名乗る少女は憧れの人に無邪気

に微笑むのであった。

?…当の憧れ十の十人が辛十そう十な顔十を押し隠し微笑むのも知らず。

姉弟

？ 僕の名前は痣城双也、僕の家は貴族の名家だ。

？ 嘗ては剣術と鬼道に秀でた武力派の家だったらしいが今では武力よりも金の力で権力を持つている、僕も成長すれば周りの大人達のようなになるのだろう。

？ だが、僕の姉は周りとは違い清廉潔白を地で行くような人だった。

「ただいま、双ちゃん。暫く見ない間に成長した？」

？ この人が僕の姉である、姉さんは今年から真央霊術院で教育を受けているがたまの休日に帰ってきては僕に構うのだが…最近では山本隊長とかいう教師の話題ばかりで少し面白くない。

「それでね、山本隊長の料理つてとても美味しいの。作り方を教わったから双ちゃんにも作ってあげるね」

？ 今日山本隊長…何でも700年前に尸魂界を救った英雄らしく姉さんが真央霊術院に行く前は少し聞いた程度だがそんな人物の事を話す時の姉上は何時も笑顔だ。

(…つまらないな…)

？僕は姉の笑顔が好きだ。

？だけどその笑顔の先に居る顔も知らない山本千歳という人に姉さんを盗られたように感じるのは僕の心が狭いだけだろうか…。

「ねえ、聞いている？双ちゃん」

「…聞いているよ、良かったね」

「もう、双ちゃんつたら何不貞腐ふてくされてるの？」

「…別に」

？なんだか悶々とするがそれもこれも姉さんが悪い。

？久しぶりに帰ってきたなら僕にだけ構ってあげれば良いのに。

「…そうだ、私最近新しい鬼道を覚えたの、双ちゃんにも見せてあげる」

「いいよ別に…」

？やめれば良いのに口を突くのは憎まれ口ばかりを叩いてしまう、僕の手を引いて庭先に出ようとする姉さんだが

「ごめんください」

？鈴の音の様に綺麗な声に表情を明るくする姉上、この声の主に心当たりがあるのだろうか？

「双ちゃん、行く」

「え、わわ…」

？手を引かれ玄関まで歩いていくと腰まで伸びた黒髪が綺麗な大きな胸の女の人
立っていた。

(綺麗なひとだなあ…)

？僕は姉さんで見慣れていたが上には上がいる、とは良く言ったものだと思う、所謂美人なのだ、目の前の人は。

「こんにちは、山本隊長！今日はどうかしましたか？」

？え？

？姉さんの声に固まってしまふ。

？この人が山本隊長…？

「こんにちは、痣城さん。今日はもしもの時の為に生徒達一人一人の御自宅を訪問しているんだよ」

「なるほど、あ、良ければあがってください、大したおもてなしは出来ませんが…」

「んー…あくまで御自宅の把握の為に寄らせて貰っただけで長居するつもりは元々無かったけど、お邪魔させて貰おうかな？…初めまして、君が痣城さんが何時も自慢して
る双ちゃんかな？」

？綺麗な虹色の瞳が僕を見つめ目線を合わせるようにしやがみこむ、その度に乳房が揺

れるから目のやり場に困る。

「あ、あの…はい、はじめまして…」

？自分でも情けなく感じるが消え入りそうな声でなんとか挨拶をする、誰だつて急に美人な人に声を掛けられれば萎縮すると思うのは僕ばかりではないだろう。

「もう、双ちゃんたら…ちゃんと山本隊長と目を合わせて挨拶して？」

「あはは、気にしなくて良いよ。…ふむ、なるほどねえ…」

「…？」

？確かに目を合わせて話すのは最低限の作法ではあるが山本さんが僕を見る目は品定めするように真剣なもので首を傾げる。

「君次第だけど、良ければ真央霊術院で学ばないかい？お姉さんに良く似てて才能がありそうだ、きつと優秀な死神になるよ」

「僕が…？」

？信じられない、という気持ちと姉さんが何時か言ってくれた言葉が重なる。

「やっぱり、双ちゃんは私よりも良い死神になるよ」

「鍛え方次第では痣城さんを守るくらい立派な死神になれるよ」

「…僕が…姉さんを…」

？姉さんを守る、この人に指導を受ければその強さを与えてくれると思える不思議な

存在感を持つ山本さん…いや、山本隊長を見つめながら。

「…やります、僕を鍛えてください。山本隊長」

「うん、分かった。」

「それじゃあ私の方からも推薦しておくよ、早くて来年から宜しくね?」

「はいっ、宜しくお願ひします」

「こうして、僕の奮闘記が静かに幕を開けた。」

———
?? ?? ??

?それから半刻程経ち…。

「取り敢えず、二人共ボクの目が届く範囲に置く事が出来たかな」

『そーだねえ、それで?これからどーするのお?』

?星葉身に問われボクは少し躊躇しながらもある二人の教え子の住む家へと向かっている。

?彼女もそれを知っている上で問いかけている分質が悪い悪戯っ子だ。

「そうだねえ…少し迷惑を掛けちゃうけど、久しぶりに昔の教え子達に逢いに行こうかな?」

『あの二人かあ、協力してくれるといいね?主』

「お互い立場があるから簡単に行くかは微妙だけどね、やるだけやる分にはタダだよ」

? そう、やる分にはタダだ。

? 片方はボクは疎か京楽や浮竹を超える頭腦の持ち主。

? 片方はこの世界の五大貴族に名を連ねる少女。

「…着いたよ、久しぶりだなあ…」

? 嘗ての教え子二人に逢う為に、ボクは四楓院家の戸を叩いた。

教え子

？四楓院家の戸を叩いて直ぐに中へと通されたボクは久しぶりに夜一さんと浦原君と顔を合わせ、此処に來た理由である痣城家を貶めんとする貴族達の動きを話す。

？無論、此処で話していても痣城家がしてしまつた後暗い事は消えはしないが少なくとも痣城さんと双也くんはすぐに魔の手が伸びるような自体は避けられるだろう。

「ふむ、そうじゃなあ…儂としては力を貸しても良いのじゃが、喜助、お主はどう思う？」
「そうっすねえ…夜一さんが良ければアタシも良いと思うっすよ」

？当初は渋い顔をされる事を覚悟していたボクだったが、二人から返つてきた返事は思ひの外色良いものであつた。

「ありがとう、二人とも。でも本当に良いのかい？久しぶりに來た上にこんなお願いをしちやつて…」

？ボクの心配を笑い飛ばすように夜一さんがボクを見つめる。

「寧ろここで恩師を見捨てるようでは、ちとばかり格好が付かないというもの。

？…まあ、どうしてもというなら別の形で借りを返してもらうのも良さそうじゃが」

「そうっすね、先生が納得しないっていうならこういうのはどうっすか？」

?二人はまるで示し合わせたかのように一人ずつ案を出してきた。

?夜一さんはこれから暇な時間があれば定期的に鍛錬に付き合うこと。

?浦原君は三百年後に勉強部屋と呼ばれる場所で使う温泉に入りその度にデータを取らせて欲しいとのこと。

(まさかあの温泉に入るとは思わなかったなあ…)

?内心感慨深いものを抱くもボクは各々の案に首を縦に振る。

「そんな事で良いなら喜んでやらせて貰うよ」

「ありがとうございます、理論上は上手く行く筈なんすけどねえ…データ採取に協力して貰えて幸いッス」

「とか何とか言いながら…喜助、お主千歳殿の裸体が見ただけじゃあるまいな?」

「そうなの?」

?少し恥ずかしいけど中身は男だし、ボクは一向に構わないけど…というかもし本当にそうなら流石は声が狙い撃つぜの人や変人48面相だな…と、首を傾げると浦原君は慌てたように首を横に振る。

「そんな訳ないじゃないっすか、そりゃあ良いおっぱ「やっぱりか、この助平」だから違いますッてば夜一さん!」

?…うん、まあ、確かに良いおっぱいだよね。

? 長年ぶら下げてて肩凝りの元凶である胸に視線を落しながら会話の流れを変えようと乾いた笑い声をあげる。

「あはは、浦原君の願いはこれで良いとして…夜一さんのお願いは未知の領域だから何とも言えないよ？」

? もしかしたら私じゃ話にならないかもしれないし…」

? 学生時代ならいざ知らず、今どれくらい夜一さんが強いかは実際に手合わせをしないと何とも言えない。

? それ故に未知の領域、百年前からある試みを鍛錬時に取り入れているからこそ解る。ボクの本領を発揮するのは矢張り斬術と鬼道なのだ。

「構いませぬ、喜助じゃモヤシ過ぎて物足りないところでしたからな。久しぶりに千歳殿と手合わせをしながら…というのも乙なものでありましょう」

「モヤシっスか、ボク…これでも鍛えてるんすけどねエ…」

? それでも構わない、と笑う夜一さんにモヤシ扱いされた浦原君は泣いていいと思う。

「ま、まあ…そういう事なら今からしようか？」

「そうするかのおう、喜助も着いてこい」

「はあ…それじゃあ行くとしましょうか」

? 目指すは勉強部屋、BLEACHファンとしては一度は入ってみたい部屋へとボクは

胸躍らせながら向かうのであった。

?? ?? ??

? 一行は勉強部屋へと足を踏み入れると早速とばかりに千歳は屈伸運動を始め、そして夜一へと振り返る。

「それじゃあ、はじめよっか」

「うむ、よろしく頼みますぞ、千歳殿」

「アタシは準備しながら見てます、二人ともやり過ぎないでくださいね」

? 浦原はそう言うのと温泉のある方へ向かい、千歳と夜一はなるだけその場から離れるように瞬歩を用い移動する。

? その速さたるや残像が残る程、並の隊士では見切る事すら叶わぬ速さを保ちながら会話を話する。

「二百年前に比べて随分速くなったね、夜一さん」

「完全に置き去りにするつもりでいたのに追い付かれては瞬神の名が泣いておりますわい」

? 二百年前から既に歩法に関しては他の追隨を許さなかった夜一ではあるが、その夜一を以てしても拮抗している事を認めざるを得ない千歳は斬拳走鬼を各々高いレベルで修めた死神である事が伺える。

「いやいや、置いてかれないように必死で食らいつついてるだけだよ」

「儂からしてみれば千歳殿の底は未だ見えませんな」

? 暫く走っていたが、二人は各々一度完全に静止し、同時に瞬間的に最速の速度を出す事で分身を作りながら互いの拳を利き手ではない手で受け止める。

「疾ッ」

「覇ッ!」

? その衝撃だけで空気が揺れるが斯様な事は瑣末事さまつごとと言わんばかりに互いに掌底や蹴りを繰り返して行く。

「一発一発も重くなってる、速さだけじゃなくて筋力も鍛えてる証拠だね」

「それを受け流しながら蹴りを返してくるのは儂が知る中では千歳殿くらいですな」

? 互いのたゆみない鍛錬の成果を褒め称えるように言葉を交わすが——千歳は一度地を蹴って後方に飛び退くと自身の靈力を極限迄超圧縮し黒き太陽を身に纏う。

「…うん、夜一さんなら何れ辿り着くだろうけど…」

「それは…!」

? 瞬間・黒輪乱舞こくりんらんぶ

? 短く、然し力強い声で己が辿り着いた白打の境地の名を口にすると千歳。

? 黒き焔は辺りの靈子を吸収するように重力を持ちながら燃え盛る。

?それは、あの夜に千歳が視た有り得た未来の千歳の再現であった。

「黒い焰…ツスカ…既存の鬼道には存在しないものツスね、何よりこの霊圧は…」

「…矢張り千歳殿に頼んで正解じゃった、…儂も今出せる本気を出すとしましょうぞ」
?瞬間ツ!

?雷光を纏う夜一。

?霊圧の差は歴然であり、その上名だたる名刀が如く研ぎ澄ました千歳の霊圧は触れただけで弾き飛ばしてしまいそうな程に練り込まれているがこの恩師を超えたいと言わんばかりに振り絞った霊圧は凄まじく…。

?二人の拳は互いを捉えぶつかり合った。